九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 筑紫君磐井の時代の東アジア

西谷，正

https://doi.org/10.15017/2230468

出版情報：史淵. 125, pp.159-178, 1988-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 筑紫君磐井の時代の東アジア

西谷　正

目　次

一　はじめに
二　六世紀前半ごろの北部九州
三　継体王朝をめぐる異常事態
四　六世紀前半ごろの朝鮮半島
五　おわりに

## 一　はじめに

『日本書紀』の継体天皇二一年の条によると、筑紫国造磐井つまり北部九州の有力豪族が、大和すなわち畿内の中央政権に対して反乱を起した。その契機は、新羅に併合された任那（加耶）の故地奪還を目的として、大和政権が任那の地、朝鮮半島東南部へ進出しようとしたことにあると伝える。この事件については、ある程度、史実を反映するものとして議論されているが、もしそうだとすると、西暦五二七、八年のころ、いいかえれば継体王朝を舞台として、北部九州と東南部朝鮮を巻き込んで起った国際的な紛争であったことになる。

いわゆる筑紫君磐井の乱は、文献史学、つまり『古事記』『日本書紀』『風土記』の世界の問題であり、考古学が立ち入ることはきわめて困難である。文献史学においても、それをめぐって諸説あり、最近では山尾幸久氏のように[1]、大和政権による国家統一戦争に対して、九州が起した独立戦争であったとする評価も現われている。しかしいっぽう、考古学からも、森貞次郎氏[2]が岩戸山古墳と、小田富士雄氏[3]が古墳群や石人・石馬からそれぞれアプローチを試みられている。

そのような現状にかんがみて、筆者はここで、磐井の反乱を考古資料と文献史料の両面から、東アジア史的な観点でながめて見ようと思う。そこで、磐井の反乱の舞台となった北部九州、筑紫君磐井の時代すなわち継体王朝期の畿内、そして、磐井の反乱の契機となったとされる任那（加耶）を中心とした朝鮮半島南部の状況を順を追って概観し、磐井の反乱問題を考える際の参考としたい[4]。

## 二　六世紀前半ごろの北部九州

磐井の反乱は、『日本書紀』継体天皇二一年（五二七）六月から同二二年一一月まで約一年半にわたったというが、その時代、つまり、六世紀前半における筑紫君磐井の勢力圏を考えるとき、つぎのような文献史料がまず想起される。『日本書紀』継体紀二一年六月の条によると、磐井は、火・豊二国に勢力を張っていたとあり、また、同二二年一二月の条には、磐井の子、筑紫君葛子が糟屋屯倉を献上したとある。これらの記事によると、磐井の勢力は、後の筑前・肥・豊国という広大な領域、つまり、北部九州一帯にまたがっていたことになる。そのような伝承の真憑性の検討はさておくとして、筑紫君磐井・葛子の本拠地についてはどうであろうか。その点で重要なのは、筑紫君磐井の墳墓のことを記載した『筑後国風土記』逸文の内容から、磐井の奥津城が、福岡県八女市に現存する岩戸山古墳に比定され、また、それによって、同墳を含む八女丘陵一帯の人形原古墳群を筑紫君一族の墓域と見られる[5]ようになったことである。

**人形原古墳群**　人形原古墳群もしくは八女古墳群は、およそ八〇基余りの古墳群からなるが、首長級の前方後円墳でもっとも古いものは、その分布の西端に位置する八女郡広川町の石人山古墳で、五世紀中ごろまでには出現している。それ以後、前方後円墳は東方へ向かってつぎつぎと営造されていくが、そのなかで頂点に立つものが、筑紫君磐井の墳墓・岩戸山古墳⑮である。ところで、筑前とくに福岡平野をはじめとする沿岸部や、筑後つまり内陸部の一部が、すでに四世紀の前半には大和政権の支配下に入っていたことは、いわゆる畿内型前方後円墳あるいは三角縁神獣鏡の分布状況と、儺県主・伊都県主（「仲哀紀」）・松浦県のそれらを合わせ考えると、じゅうぶんに推測が可能である。それに対して、筑後南部の八女郡では、そうした情勢は五世紀前半を待たねばならなかったようである。ともあれ、筑紫君は、五世紀前半でも中ごろに近いころから、大規模な八女古墳群を営造した。しかし、その首長級の古墳は、いずれも前方後円墳であり、いわば畿内色を濃厚にとどめている。このことは、とりもなおさず、筑紫君が大和政権下に所属していたことを物語るものであろう。いっぽう、文献史料でも、『日本書紀』景行紀一八年の条に見るような八女県伝承として現われている。とはいえもちろん、岩戸山古墳における石人・石馬の発達に見られるように、在地性の強さも示している。

**筑後南部の古墳群**　つぎに、筑後南部でも八女古墳群の北側に隣接する地域の古墳群を見ていくと、まず、久留米市大善寺町にある御塚・権現塚古墳が注目される。御塚古墳は、いわゆる帆立貝形の前方円墳であるが、三重の周濠を備えている点に特色があり、周濠を含めた全長は一二三メートルを超える。これまでに出土している須恵器や各種の埴輪から考えて、五世紀末から六世紀初頭にかけて築造されたといわれる。なお、ここから出土したと伝える土器のなかに、朝鮮舶載の陶質土器が二点知られる。権現塚古墳は、御塚古墳の北東部に近接した位置に築かれた、直径一五〇メートルを超す大形円墳である。ここにも二重の周濠がめぐっている。やはり、須恵器・土師器・埴輪などの出土遺物から、御塚古墳と同じころの年代が考えられている。この付近には、これらの二つの古墳のほかにも、すで

に消滅してしまっているが、御塚古墳よりも規模が大きかったと推測される銚子塚古墳をはじめ、四〇数基の古墳群があったと伝えられている。そうなると、この古墳群は、『日本書紀』雄略天皇一〇年の条に登場する水間君の墓域であった可能性が出てくるのである。[7]

つぎに、筑後平野の東端にあって、耳納山地の北側に位置する、福岡県浮羽郡の吉井町には、月の岡・日の岡両古墳に代表される古墳群[8]がある。月の岡古墳は、全長約九五メートルの前方後円墳であるが、周濠も有している。長持形石棺を包蔵した竪穴式石室からは、甲冑・馬具・銅鏡など多数の遺物を出土している。そのほかにも、墳丘から各種の埴輪が出土しているが、これらの遺物から見て、五世紀中葉ごろに築造されたものと思われる。月の岡古墳のすぐ東側の位置に築かれた日の岡古墳は、全長約七四メートルの前方後円墳で、後円部には横穴式石室があり、その四壁のほぼ全面を同心円文や三角文などの装飾図文で飾った装飾古墳である。この古墳は六世紀の後半に属するが、月の岡・日の岡両古墳に時期的に介在するのが、さらに日の岡古墳の東側に築かれた塚堂古墳である。これらの古墳群を生葉地区の西部に築造した首長層を考えるとき、大和の葛城氏と係わりをもつ的氏を想定するのが妥当であろう。

これらの古墳群が、筑後川左岸地域を背景としているのに対して、筑後川右岸地域では、甘木・朝倉地区と筑紫・小郡地区に顕著な古墳群が認められる。そのうち、後者の地区つまり筑後と筑前との境に当る筑紫野市から小郡市にわたる三国丘陵の東端付近には、前期古墳が点在して有力集団の存在が想定できるが、五世紀の前半をもって消滅する。この古墳群形成の背景については、後で触れるように、式内社筑紫神社や「筑紫神」伝承などを考慮して、筑紫君との係わりが考えられており、その後、その勢力の中心は南方の筑後平野へ移ったとされる。

三国丘陵の北側に続く、筑前わけても福岡平野は、筑紫君葛子が献上したと伝える糟屋屯倉の所在地として、おそらく筑紫君と直接の関係があった地域と思われる。筑前でも福岡平野に限って見てみると、四世紀の段階に、いわゆる畿内型の前方後円墳は、福岡平野中心部に位置する那珂台地や縁辺部に、それぞれ福岡市那珂八幡古墳[9]とか、同じ

く名島・香住ヶ丘両古墳といったところに築造されていた。ところが、六世紀後半までも全長六〇メートル級の大形の前方後円墳が営造されるのは、福岡市那珂の剣塚古墳に見られるように、那珂台地だけである。そうした古墳群形成過程の背景にはおそらく、那珂台地付近を墓域とした強力な勢力の存在が想定されよう。

他方ひるがえって、八女古墳群に隣接する筑後南部の南側の地域に目を転じると、山門郡瀬高町付近に、おそらく五世紀代の車塚や権現塚に代表されるように、やはり一つの勢力の中心があることは事実であるが、六世紀の前半の段階では顕著な古墳は見られない[10]。

さらに、山門郡の南方に接っする三毛地区の北部には、大牟田市黒崎の舟形石棺群、同宮崎の家形石棺包蔵の古城山古墳、同倉永の箱式石棺に線刻の装飾文を刻んだ茶臼塚古墳、そして、高田町の武装石人を墳頂に立てた石神山古墳など、五世紀代の古墳が点在している。そうした古墳群の被葬者については、おそらく日下部氏との関連[11]を考えるべきであろう。

**古墳群と豪族の分布**　以上に述べてきた古墳群は、とりもなおさず、そこに大なり小なり古代豪族が蟠居していたことを物語っている。そのうち、三池郡高田町の石神山古墳、八女市の八女古墳群、久留米市の御塚・権現塚古墳、そして、浮羽郡吉井町の月の岡・日の岡両古墳などに代表される古墳もしくは古墳群出現の背景として、『日本書紀』景行天皇一八年七月から八月の条を想起する。すなわち、筑紫後国として、御木の高田行宮、八女県の八女津媛・八女国、水沼県主猿大海、的邑などと登場してくるのは、大和政権と在地勢力の何らかの政治的関係の成立と、それを契機とする古墳造営と表裏一体の関係にあると考えたい。同じように、『日本書紀』神功皇后九年三月の条に、「山門県に至りて、即ち土蜘蛛田油津媛を誅ふ[12]」とあって、山門県に田油津媛があり、さきに見た車塚・権現塚築造の背景をなすものであろう。

ここで参考までに、肥後北部の豪族である日置氏の場合を見ておこう。日置氏は、菊池川流域に勢力を張っていた

が、その一族の盟主的な墳墓は、熊本県玉名郡菊水町の江田船山古墳である。ここからは著名な銀象嵌鉄製環頭大刀が出土しているが、そこに見られる銘文を、埼玉県稲荷山鉄剣銘文の例から推して、従来のような「治天下蝮宮瑞歯別王」（反正）ではなく、「治天下獲加多支鹵大王」（大泊瀬幼武天皇＝雄略）と解釈する立場を支持したい。そしてまた、被葬者である无利弖を、ワカタケル大王に典曹人として仕えた人物とする説にもまた賛意を示したい。つまり、上記の大刀は、大和政権から在地豪族の日置氏に下賜されたものと考える。同じような状況が、前述の古墳群の場合においても発生しており、そのことがそれら古墳群出現の契機となったと考える。

**筑紫君磐井の位置と性格**　さて、八女古墳群とその周辺地域の古墳群の分布状態を見てここにいたるとき、北部九州で最大規模を誇る前方後円墳と古墳群を残した一大勢力として、筑紫君磐井を頂点とする筑紫君家の勢力圏設定の可否が問題となる。そこでまず、文献史学の見解を井上辰雄氏の場合で見ると[13]、筑紫君磐井の本拠地を、石人山古墳や岩戸山古墳などの存在より考えて、八女市から八女郡広川町にかけての地域とされる点は、考古学の立場と一致する。そして、井上氏は、『日本書紀』によれば、磐井と物部麁鹿火との決戦場が御井郡であるところから、磐井の勢力範囲として、久留米市から八女市にまたがる地域を考えられ、結局のところ、筑後川南岸から矢部川流域を想定される。井上氏は、つぎに、筑紫野市原田付近を重視される。つまり、ここには筑紫君が奉斉している式内社の筑紫神社があることや、そこが筑紫と肥前の境に位置して交通の要衝地に当たるからである。井上氏はさらに、筑紫君葛子が献じた糟屋屯倉を福岡県粕屋郡粕屋町わけても福岡市域の多々良川河口に求め、筑紫君の外交の港とされる。また、磐井の反乱を決意するや、この港に高句麗・百済・新羅・任那の貢をもたらす船を誘致したのも、ここが筑紫君にとって大陸の文物を導入する港であったからとされる。以上のように、井上氏は、八女市・久留米市から筑紫野市を経て、粕屋を結ぶルートが筑紫君の生命線であって、これらの地域をおさえて、筑紫君は大豪族として発展したとされるのである。そしてさらに、『日本書紀』欽明紀一七年には、「筑紫火君」に対し、百済本記に云うとして注があり、「筑

紫君の児、火中君の弟」とある記事を引いて、筑紫君の一族と、肥後の豪族との間における通婚関係による結びつきが推測されている。ここで、火君の本拠地については、山尾幸久氏のように、江田船山古墳に代表される菊池川流域の勢力とする考え方もあるが、やはり、井上氏のいわれるように、宇土半島の基部から八代市にかけての勢力圏を想定し、そこにある姫ノ城古墳をその奥津城とするのがよかろう。

なおまた、豊の国に関しては、『筑後国風土記』逸文に見える、磐井終焉の地が豊前国上膳県であってみれば、現在の福岡県築上郡大平村から豊前市の地域が問題になる。ところが、この付近にはいまのところ、六世紀前半までの築造に係る顕著な古墳群は認められない。

ともあれ、筑紫君磐井の勢力圏を考える上で、考古学からの小田富士雄氏の見解[14]は興味深い。畿内を中心に日本の古墳文化には、特徴的な遺物として各種の形象埴輪が知られる。ところが、小田氏によると、岩戸山古墳には、それらと内容的にほぼ同じ石製品が豊富に見られる。すなわち、武装石人・裸体石人などの人物、石馬・猪・鶏・水鳥などの動物、靭・盾・刀・坩・蓋・翳などの器財などが、墳丘上や別区に立てられていたのである。これらはいわゆる石人・石馬と呼ばれるが、その分布を見ると、福岡・熊本・大分、そして、佐賀に及んでいる。この事実は、前述の磐井に係わる伝承上の筑紫・火・豊の諸地域と関連が見られることになり、そこに磐井の勢力圏を見ようとされる。ところが、磐井の乱の後、石人・石馬は消滅するが、それについては、反逆者の文化として継承を禁圧されたと解釈される。

ところで、少し時代はさかのぼるが、北部九州、とくに筑前・三雲寺口遺跡、有田遺跡二号住居跡および三一街区、井河一号墳、松木遺跡や、筑後・茶臼塚、隈平原一・二・五号墳、塚堂遺跡、御塚古墳、石人山古墳、瑞王寺古墳、立山山一二号墳における、五世紀代の初期須恵器の胎土分析によると、すべて筑後・小隈窯か、和泉・陶邑窯の製品に帰属[15]する。すなわち、一四個所の古墳もしくは遺跡から出土した六六点の須恵器のうち二七点が小隈窯産であり、残りは一八点の陶邑産を含む外部からの搬入品である[16]。この事実は、一つには、当時の須恵器生産の体系から見て、

筑後・小隈産が北部九州でも重要な位置を占め、そこでの大豪族との係わりを考えさせる。筑後・小隈窯に関係のある古墳群を求めると、その東南方約六・八キロに位置する甘木市の茶臼塚古墳や、ここは逆方向の西北西約四キロに位置する小郡市の横隈山古墳が目につく。横隈山古墳が所在する三国丘陵には、前にも少し触れたが、古墳時代の初頭から古墳群が築造されており、また、五世紀前半を境にして古墳群が衰退傾向を示す点を、この勢力が、生産性の高い筑後平野の中心地帯へ南下したことと関連づけられる[17]。しかも、その三国丘陵における前期古墳群を含む筑紫野・小郡の地峡を、式内社筑紫神社や『筑後国風土記』逸文に見える「筑紫神」伝承と結びつけて、筑紫君の本拠地とする見解[18]がある。こうして見てくると、小隈窯は筑紫君という豪族の統制下にあり、そのことはまた、筑紫君磐井の時期までも筑後一帯がその一族の支配下にあった可能性も示唆する。もっとも、五世紀後半から六世紀にかけて、装飾古墳に見られる棺槨の形態・構造、文様の種類と構成、表現手法などの諸特色の検討によれば、八女丘陵と北部九州の各地域との間には、それぞれが一定程度の自立性を保っており、その上で、選択的な交流も行なわれていて、とくに、八女丘陵を背景とする磐井の勢力が他地方を圧倒したことは考えられないという立場[19]もある。ともあれ、その場合でも、さきに紹介したように、磐井の勢力圏には、小隈産についで、同時に陶邑産の須恵器が含まれており、あくまでも畿内中央の大和政権の影響下にあったことを意味しよう。このように見てくると、北部九州の各地に営造された古墳群のなかでも最大規模の岩戸山古墳であってみれば、筑紫君磐井が一大勢力を形成し、かなり広範な地域を影響下に置いていたかもしれないが、その場合でも、前方後円墳という畿内的な墓制を継続的に採用していることからも見られるように、大和政権下という大きな傘のなかでの現象であったことは、前にも述べたところである。

つぎに、筑紫君磐井の墳墓である岩戸山古墳の周辺に関して、もう一つ付け加えておきたい特色ある性格として、朝鮮半島南部との係わりである。たとえば、八女郡広川町の石人山古墳後円部南裾のくびれ部寄りで採集された坩と高坏は、五世紀前半または前半後葉ごろに推定される加耶系統の陶質土器[20]である。八女市の立山山古墳群[21]でも、その

二四号墳（石棺）周溝出土の大甕は、共伴の土師器から見て五世紀初頭ないし前葉とされる。また、同八号墳横穴式石室出土の垂飾付金製耳飾りは、共伴の須恵器から六世紀中葉に近いころのものであろう。同じく八女出土と伝える台付長頸壺が筑後市郷土館に所蔵されている。いずれも加耶系統の遺物である。近くの山門郡瀬高町では、清水寺付近の山林中から、おそらく横穴式石室から出土したと思われる新羅系統の高坏がある。久留米市では、御塚古墳で坏・蓋二点（大善寺小学校蔵）、権現塚古墳で坏・蓋二点（旧清力美術館蔵）がそれぞれ知られるが、ともに新羅系統の陶質土器である。さらに、浮羽郡吉井町の月の岡古墳出土品の金銅製品には新羅色の濃いものがあり、また。塚堂遺跡では、五世紀前半の陶質土器が出土している。

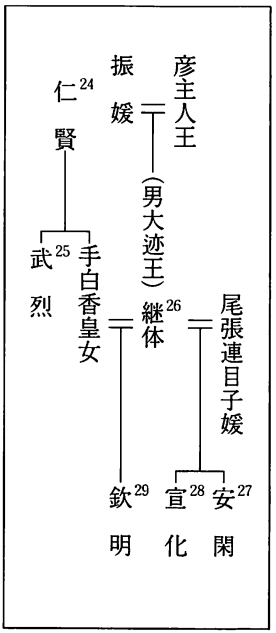
**磐井の乱後の問題**　磐井の乱が終結した後、『日本書紀』安閑紀二年五月の条には、各地に屯倉が設置されたことを記載している。その冒頭に、筑紫の穂波・鎌、豊国の朕碕・桑原・肝等・大抜・我鹿、そして、火国の春日部の諸屯倉が登場する。このことは、あたかも「継体紀」二二年五月の条の筑紫国造「磐井、火・豊、二つ国に掩ひ據りて、使修職らず」という記事に対応するかのようである。換言すれば、磐井の旧勢力圏に楔を打ち込むかのように屯倉が設置されたと見るのである。この点に関連して、考古学的には、小田富士雄氏の指摘がある。というのは、それまで盛行していた石人・石馬が、急激に消滅していく時期の前後から、装飾古墳の横穴式石室内部の壁面に、石の盾や靫を図化したような彩色画が発達してくる。そのような現象に対して、地上での表飾が禁圧された結果、地下に沈潜したと考えられている[22]。

しかしながら、八女丘陵では、六世紀中葉以降も合計六基の前方後円墳がほぼ間断なく営造されるなど、乱後に筑紫君磐井の勢力が壊滅的な打撃を受けたともいえない[23]ようである。そうなると、磐井の子・葛子が「父に坐りて誅せれむことを恐りて、糟屋屯倉を献りて、死罪を贖はむことを求ふ」た効果があったと解すべきであろうか。さらにいえば、磐井の勢力は温存されたというべきであろうか。

いっぽう、最近の調査結果によると、福岡市博多区比恵遺跡群の一角で、六世紀後半から七世紀のものと考えられる、柵状遺構、三×三間の倉庫と推定される総柱建物群、二×九間の建物などが検出され、そのなかに官衙的施設の正庁の一部と思われるものも含まれる。これらの遺構群は、那珂川と御笠川に挟まれた安定した洪積台地上で、いわば「那津之口」に立地し、また、周辺には三宅田・官田の小字が確認されることなどから、『日本書紀』宣化元年（五三六）五月の条に見える、「官家を、那津の口に修り造てよ」とある、那津官家や、「亦諸郡に課せて分り移して、那津の口に聚め建てて、非常に備えて」の記事に関連づけられる可能性が高まっている。こうして、磐井の乱後の問題を考える足がかりも少しずつできつつあるのである。

## 三　継体王朝をめぐる異常事態

**継体天皇をめぐる皇位継承問題**　筑紫君磐井の時代すなわち継体王朝の時代には、国内では、大和政権の内外で異常な事態が発生している。まず、大和政権内部では、周知のとおり、継体天皇の即位をめぐる問題がある。武烈天皇の崩御後、皇位継承者が不在のため、新しい天皇は大伴金村によって擁立されることになる。その人物は、後に越前国坂井郡に属する三国の勢力を背景とする、応神天皇五世の孫の彦主人王と、近江国高嶋郡の三尾を背景とする垂仁天皇の七世の孫の振媛との間に生まれた、男大迹王である。つまり、大伴氏が、越前や近江の勢力を結集したとも考えられるのである。しかも、そうして即位した継体天皇は、即位



後二〇年目にしてようやく大和入りするという異常な状況下にあった。すなわち、『日本書紀』によると、樟葉宮で即位した後、五年後に筒城宮、六年後に山背弟国宮と遍歴し、二〇年目に大和国・磐余玉穂宮に入っている。その背景には、継体天皇の大和政権の中枢部入りを阻害する勢力、たとえば、物部氏などがいたといわれ、あるいは、大和の勢力が、畿外の勢力の浸透を歓迎しなかったともいわれる。

つぎに、継体天皇は、即位後、二五年目に当たる辛亥の年（五三一）に八二才で崩御しているが、その後の皇位継承をめぐっても意外なことが起こっている。文献史学者によると、たとえば、喜田貞吉氏や林屋辰三郎氏のように、安閑・宣化（大伴氏）と欽明（蘇我・物部）の二朝（両朝併立）説や、山尾幸久氏のように、皇位は継体朝から欽明朝へ継承されただけで、安閑・宣化の二代は実在しなかった蓋然性が大きいとされる説である。

**各地の反乱伝承**　さらに、畿外では、磐井の乱の前後に、よく似た反乱事件が起っていることも周知のとおりである。『日本書紀』では、まず、磐井の乱の前に当たる五世紀後半の雄略朝に、山陽で吉備の大豪族・吉備氏の反乱[29]を伝える。しかもこの場合、朝鮮半島の任那や新羅も係わっているようである。岡山県総社市に残る造山・作山の両古墳の存在と朝鮮系遺物の出土は、右の伝承との関連を示唆する。また、東国の北関東において、磐井の乱が終焉して間もないころ、「安閑紀」元年の条は、武蔵国造の地位継承をめぐる争乱を伝える。笠原直使主とその同族の小杵との間の国造の地位継承抗争に際し、使主の側に立つ大和政権と、小杵を援助した上毛野君小熊の勢力との間に争乱が発生している。やがて使主は大和政権の後盾で国造となるが、横渟・橘花・多氷・倉樔の四つの屯倉を献上している。北武蔵の笠原直の本拠地付近には埼玉古墳群が築造されていて、武蔵国造家の墓域とされる[30]。ここでも、古墳群と古代豪族、そして、反乱とその後の屯倉献上という、磐井の乱の場合と同じようなパターンが認められるのである。

**継体天皇陵について**　さて、継体王朝の異常事態に関して、ここでもう一つの問題が想起される。それは、継体天皇陵をめぐる問題である。というのは、四世紀から六世紀の天皇陵が、ほとんど大和や河内など畿内の中枢部に比定

されているのに対して、どういうわけか継体天皇陵がひとり摂津にあるからである。この問題を解く鍵は、その出自に係わるものと思う。継体天皇の出自といえば、『日本書紀』の記述にもとづいて、越前三国とする立場が通説的であるように思われる。しかし、山尾幸久氏のように、近江三尾（鴨県主）をとる研究者も見られる。その点に関して筆者は、摂津三島を考えたい。その最大の理由は、継体天皇の陵墓が、越前でも、近江でもなく、摂津三島、すなわち、現在の大阪府高槻市にあるからである。

継体天皇陵については、『古事記』では、「御陵は、三嶋の藍の御陵なり」と、また『日本書紀』には、「冬十二月の丙申の朔庚子（五日）に、藍野陵に葬りまつる」とある。さらに、『延喜諸陵式』には、おそらく記紀の記載を受けて、「三嶋藍野陵〈磐余玉穂宮御宇継体天皇。在摂津国嶋上郡。兆域東西三町。南北三町。守戸五烟。〉」とあって、これらの文献史料を正しいとして、摂津・三嶋・藍野・嶋上郡にある天皇陵級の巨大古墳の二基のうちの一つで、茨木市にある墳丘の全長二二六メートルに、一重濠を有する茶臼山古墳が、明治いらい現在まで、宮内庁によって継体陵に比定されている。

ところで、継体天皇陵については、それが真の陵墓でないことは、すでに早く四〇年ほど前に天坊幸彦氏が、上記の『延喜式』などによると、「嶋上郡」にあると記しているが、条里制の調査を通じて、当時の郡境を考えると、継体天皇陵は嶋下郡にあって疑問であるとされた。したがって、真の継体天皇陵は、茶臼山古墳から東方に二キロのところで、高槻市にある墳丘の全長一九〇メートルに二重濠を有する今城塚が正しいとされた。[27] その後、考古学的にも、墳丘の形態研究が進むと、茶臼山古墳の設計企画は六：一：三の比率の典型的な応神陵古墳タイプで、五世紀初頭に推測されるのに対して、今城塚古墳は六：二：三の土師・河内大塚タイプで年代が下がることが指摘された。[28] また、今城塚古墳の埴輪の年代は六世紀前半であること[29]が判明している。そして、最近、「継体天皇陵」において、外堤の葺石や裾のラインを確認するため、二六個所のトレンチで発掘調査が行なわれた結果、出土した円筒埴輪は、外面が

ヨコハケ調整で、黒斑がなく、穴窯焼成によるものであることから、五世紀中葉のものと考えられ[30]、その年代観からも茶臼山古墳が六世紀前半ないし中ごろの継体天皇の陵墓ではないことが追認された。

ここで、今城塚が真の継体天皇陵とすると、当時における前方後円墳の縮小化現象のなかで、継体天皇陵（今城塚古墳）は、時代傾向に反して、ひじょうに巨大化していることが注目される。また、さきにも触れたとおり、河内・大和だけでなく、摂津という飛び離れた地域であることなどの二点で異常なのである。

さて、今城塚古墳のある摂津北部の三島地域は、大きく東・西の二地区に分かれるが、四世紀初頭ごろの弁天山A一号墳いらい、五世紀後半の茶臼山古墳を経て、六世紀の中ごろにいたるまで、二百数十年間にわたって成層的に前方後円墳を営造[31]しており、今城塚古墳はいわばその頂点に立つ感さえする。そうなると今城塚古墳の被葬者つまり継体天皇は、ここ摂津・三島を基盤としていたのではないか、もっといえば、摂津政権（三島県主）ともいうべき一大勢力の想定が可能なのではなかろうか。

**継体天皇と大和政権**　さてここでもう一度、さきにも少し触れた継体天皇の遷都記事を想起し、大和との関係を考えてみたい。遷都記事に出てくる樟葉・筒城・弟国は、摂津三島と大和の中間に位置するが、それぞれに古墳群、換言すれば、豪族の分布が見られる。すなわち樟葉宮は、『和名抄』でいうと、河内国交野郡葛葉郷で、現在の大阪府枚方市楠葉に属する。現在の楠葉には古墳は少ないが、その南方へ八キロ以内のいわゆる交野ヶ原を合わせ考えると、四世紀半以後、古墳の造営がいくつかの支群に分かれて盛んに行なわれた[32]。ついで、筒城宮と弟国宮は、それぞれ山城国の綴喜郡と乙訓郡に相当する。綴喜郡には、楠葉からいうと東側の八幡丘陵（男山丘陵）を越えた反対側に、現在の八幡市から田辺町にかけて、いくつかの支群を含む古墳群が四世紀後半以後、形成されている。また、乙訓郡には、向日丘陵一帯に、四世紀初頭いらい、一大古墳群が見られることはよく知られている。これらの古墳群と摂津三島の両者を統一的にとらえて、摂津三島、すなわち、摂津政権あるいは継体政権が、それらの豪族を結集していった

のではないかと推測する。

ところで、継体天皇は、即位後も大和には迎え入れられず、二〇年も大和周縁部に放置されたとさえいわれる。ところがある時点で継体天皇は、仁賢天皇の娘、手白香皇女を皇后とした。つまり、この伝承は、継体＝三島政権が、大和の中枢部と結合したことを示すのではなかろうか。因みに、手白香皇女の衾田墓は、奈良盆地の東方山麓にあって、初期大和政権の盟主墓を含む大和古墳群中の西山塚古墳に比定されることは、興味深い。[24]

さらにここで、「継体紀」と多くの点で合致し、その一部は継体朝の歴史伝承をモデルにしているとされる神武伝説[25]を参考としたい。つまり、三島溝樴耳神いいかえれば、三島政権の首長の娘は、大和の神と考えられる[26]事代主神に嫁ぎ、媛蹈韛五十鈴媛命をもうけるが、その媛蹈韛五十鈴媛命が、実は神武天皇つまり継体天皇の后妃となっている。

事代主神＝三島溝樴耳神＝媛蹈韛五十鈴媛命＝神武

この伝承の背景には、三島の勢力と大和政権との間の密接な関係がうかがえるのである。さらに、ポスト継体王朝を考えた場合、「安閑紀」によると、摂津三島には竹村屯倉が設置されている。竹村屯倉は、『和名抄』の島上郡高上郷の想定され、継体天皇陵の東南方一帯に当たると思われる。ここで想像をたくましくし、合わせて二朝対立説をとった場合、継体天皇の大伴系氏族に対して、欽明天皇の蘇我氏が、相対立する継体天皇の故地に楔を打ち込んだとも受け取れよう。その場合、継体天皇陵に続くべき大形もしくは中形の前方後円古墳は姿を消していることも参考となろう。

## 四　六世紀前半ごろの朝鮮半島

朝鮮の『三国史記』は、一二世紀前半に撰せられたものであるが、六世紀以後に関しては、その記事は史実に近いものとされる。そこで、『三国史記』を参考にすると、まず、「高句麗本紀」によって、六世紀前半の対外関係を見ると、高句麗は、五二三年に百済を侵し、五二九年に百済と五谷（瑞興）で戦うなど、概して、両者間には不和の状態にあったが、新羅とは友好関係にあった。いっぽう、高句麗は、五二三年に北魏へ、そして、五二六・五二七年に梁へそれぞれ朝貢するなど、中国の南・北二朝とは外交関係をもっていた。考古学的に見ても、高句麗と百済における互いに相手を意識して築造された山城の分布や、高句麗文物の新羅への流入もしくは受容によって、ある程度は跡付けられよう。

「百済本紀」では、百済は、五二九年の高句麗王による北辺の陥城に対する攻略を伝えて、高句麗との不和を記している。百済は、新羅に対しては、五二五年に修交するが、武寧王陵出土品における新羅文物との共通性は、その間の事情を物語るものであろう。もちろん、それはあくまでも一時的な修交であって、両者間における緊張状態は山城の分布からもうかがえる。いっぽう、百済と加耶との関係は微妙である。『日本書紀』によると、五一二年（武寧王一二）に、加耶の四県が割譲され、また、『日本書紀』では、五一〇年代に、任那諸国の有力国である北加羅が、もともと五世紀後半の四七九年に、百済の援助で南斉に朝貢し、「加羅国王」に冊封されている間柄であったが、百済と対立している。百済は、五二四年に梁の高祖から「持節都督百済諸軍事綏東将軍百済王」に冊封され、南朝梁との外交を記すが、そのことは、武寧王陵の塼築墳とその出土品をはじめ、南朝梁との関係の深さは早くから指摘されてきたところである。そうした情勢のところへ、倭が係わってくる。すなわち、百済と北加羅の両国は、倭へ遣使している。そこで、倭は百済を支持し、北加羅を実力で威嚇している。すると、加耶は、新羅に接近し、新羅王女と通婚

するのである。百済と倭との関係でいえば、『日本書紀』にいう、嶋君すなわち武寧王の伝承は、武寧王陵の買地券や中国の『梁書』の記事とも一致するので、史実と考えられるが、引き続き友好関係が保たれていたものと思う。

いっぽう、「新羅本紀」では、まず、高句麗との関係を見ると、あまり記載はないが、引き続いて友好関係にあったと思われる。その一つは、法興王一五年（五二八）に仏教が公認されるが、おそらくそれ以前に高句麗から伝来していたものであろう。最近、慶尚北道栄豊郡順興面邑内里で発見された壁画古墳も高句麗系のものである。また、慶州の新羅古墳である積石木槨墳出土の耳環や銅壺のなかに高句麗系のものが含まれることも、その間の事情を物語るものであろう。新羅と百済との関係は、「新羅本紀」からも同じことがいえるが、五二一年における梁への遣使朝貢に当たっては、百済が仲介の労をとっている。そのような友好関係を物語るものは、武寧王陵出土品における新羅と共通の遺物の存在であり、天馬塚出土の黒褐釉越磁も、百済を通じて南朝からもたらされたものであろう。

さて、新羅と加耶の関係は微妙である。「新羅本紀」では五二二年に、加耶国王が婚姻を請うたので、比助夫の妹を送ったとか、五二四年に、加耶国王が来て会見したとあるのは、婚姻もしくは外交による平和的な関係の成立である。しかし、同じ五二四年に新羅の王が、南の境界を巡視し、国境を拓定したとあるのは、それだけ緊張状態もあったことを意味するわけである。そしてやがて五三二年の記事のように、金官国王（南加羅）が投降したとなると、武力的もしくは軍事的な掌握を示すものかもしれない。このことから、新羅の加耶に対する侵攻が始まる。慶尚南道梁山郡下北面の尊池里土城では、慶州の天馬塚出土の土器と似たものが、土城築造後に堆積した地層から出土しており、築造年代を六世紀以前に推定されている。そうなると、この土城は、位置的に見て、新羅が加耶に対抗するために築かれた可能性[37]が出てくる。そして、昌寧における辛巳年すなわち真興王二二年（五六一）の拓境碑の建立となっていくのであろう。また、新羅と倭との関係といえば、『日本書紀』は、その間における不和の状況をじゅうぶんに伝えている。

## 五　おわりに

ここでもとにかえって、新羅と筑紫君磐井が結びついていたかどうかの問題に立ち返えろう。上述のとおり、確しかに金製耳飾や陶質土器などの出土に象徴されるように、筑紫君磐井を含めて、北部九州は、新羅や加耶と関係があった。その間で行なわれた対外交流に際して、沖の島に奉斎される宗像大神は、航海安全の守護神として重要な役割を果たした。すなわち、『日本書紀』神代紀に、「今、海北道中に在す。号けて道主貴と日す。此、筑紫の水沼君等が祭る神、是なり」と見るとおりである。

沖の島の祭祀遺跡からは、馬具・鉄鋌・鋳造鉄斧・ガラス・金製品など、新羅および加耶系の遺物が出土していることはよく知られている。いっぽう、筑紫君磐井など北部九州とは断定できないが、最近、慶州の新羅古墳から石釧などの倭製品が出土している。もちろん、この一つの事実は、ただちに「任那日本府」などとは結びつかない。ところで、大和政権は、倭の五王の終焉後、百済とのみは正式の外交関係を結んでいた。大和政権自体は、新羅と対立していたとしても、筑紫君磐井を含め、北部九州の諸勢力が独自に、いわば民間外交を行なっていたとしてもかまわない。そうした外交の二重構造[38]については、説得力のある考え方といえよう。そのような国際環境のもとで、筑紫君磐井を主とする北部勢力が、上述のような大和政権内・外での動揺に乗じて乱を起し、新羅の勢力を後盾としたことはじゅうぶんに考えられる。そのことは、北部九州における独立政権の樹立を意図したのか、単なる反乱なのか、それとも大和政権の打倒をめざしたものであったのか、いずれとも判断はしかねるが、ともかくそのような反乱が発生しても何ら不思議ではない東アジアの情況にあったのではなかろうか。

日本古代国家の形成過程において、大和政権は、外交の基地としての北部九州の掌握におそらく命運をかけ、筑紫君磐井の反乱の鎮圧をバネとして、文字どおり、古代国家の確立に向かって新たな歩みを始めたのであった。その意

味で、そのような国際的契機は、日本における古代国家の形成にとって重要なファクターの一つであったことを改めて痛感するのである。

〔注〕

① 山尾幸久、一九五八「文献から見た磐井の乱」『古代最大の内戦磐井の乱』九七～一五三頁、大和書房。

② 森貞次郎、一九五六「筑紫国風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』第四一巻第三号、一九～三四頁。

③ 小田富士雄、一九七〇「磐井の反乱」『古代の日本』三、一五九～一七四頁、角川書店。

④ 本稿の一部は、京都大学大学院文学研究科修士課程に在学中、小林行雄先生に提出した一九五六年度単位リポート「継体・欽明朝の政治過程（予察）」と、一九八五年一一月二三日に行なわれた岩戸山歴史資料館開館一週年記念講演会において、「磐井の時代の東アジア」と題して発表している。

⑤ 森貞次郎、一九五六「前掲論文」。

⑥ 佐田茂編、一九八四『甦る古代の豪族磐井』岩戸山歴史資料館展示図録。

⑦ 久留米市史編さん委員会、一九八一『久留米市史』第一巻、三二一～三二四、三六七～三六八頁。

⑧ 福尾正彦、一九八二「筑後日の岡古墳とその周辺」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』（下巻）一〇二七～一〇四六頁。

⑨ 福岡市教育委員会（井沢洋一・米倉秀紀編）、一九八六『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第一四一集。遺跡確認調査及び緊急調査概報」『福岡市博多区那珂所在　那珂八幡古墳　昭和五九・六〇年度の重要

⑩ 西谷　正、一九七六「山門郡の考古学」『九州文化史研究所紀要』第二一号、二一～二四頁。

⑪ 板楠和子、一九七七「有明文化圏の形成」『古代の地方史』第一巻西海編、一一五～一二六頁。

⑫ 以下、『日本書紀』本文の引用は、板本太郎ほか校注、一九五六『日本書紀』下（『日本古典文学大系』六八、岩波書店）による。

⑬ 井上辰雄、一九八四「筑紫君磐井の叛乱の謎」『日本古代史と遺跡の謎』総解説、一一六～一二一頁、自由国民社。

⑭ 小田富士雄、一九八五「考古学から見た磐井の乱」『古代最大の内戦磐井の乱』五二～五七頁。

⑮ 三辻利一・杉直樹、一九八六「北九州の初期須恵器の胎土分析」『古文化談叢』第一六集、二九頁。

⑯ 三辻利一・辻本秀明・杉直樹、一九八六「五～六世紀代の地方窯産須恵器の搬出先（第一報）小隈窯跡群産須恵器」『X線分析の進歩』第一七集、二六六～二七七頁。
⑰ 小郡市教育委員会（片岡宏二編）、一九八五『三国の鼻遺跡Ⅰ』『小郡市文化財調査報告書』第二五集、一五二～一五六頁。
⑱ 森貞次郎、一九七七「磐井の反乱―古墳文化からみた磐井の反乱―」『古代の地方史』第一巻、一七七～一七八頁、朝倉書店。
⑲ 石山勲、一九八六「岩戸山古墳は北部九州統一支配を明示しない」『歴史読本』第三一巻第六号、二三九～二四三頁。
⑳ 牛嶋英俊、一九八五「筑後石人山古墳出土の陶質土器」『古文化談叢』第一五集、三九～四二頁。
㉑ 八女市教育委員会（佐田茂・伊崎俊秋編）、一九八三『立山山古墳群』『八女市文化財調査報告書』第一〇集。
㉒ 小田富士雄、一九八五「前掲論文」。
㉓ 石山勲、一九八六「前掲論文」二三八～二三九頁。
㉔ 福岡市教育委員会（柳沢一男編）、一九八五『比恵遺跡　第八次調査概要』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第一一六集。柳沢一男、一九八七「福岡市比恵遺跡の官衙的遺跡群」『日本歴史』第四六五号、九一～九八頁。
㉕ 西川宏、一九六四「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』一五〇～一五一頁、考古学研究会。
㉖ 前川明久、一九七七「東国の国造」『古代の地方史』第五巻、七九～八二頁。
㉗ 天坊幸彦、一九四七『上代浪華の歴史地理的研究』三六四～三九五頁、大八洲出版株式会社。
㉘ 上田宏範、一九七五『前方後円墳〔第二版〕』二〇三～二〇六頁、学生社。
㉙ 高槻市教育委員会・大船孝司氏の教示による。
㉚ 都出比呂志、一九八六「継体陵（茶臼山古墳）の見学記」『日本考古学協会会報』No.九三、二六～二七頁。
㉛ 森田克行、一九八五「地域における編年―摂津」『季刊考古学』第一〇号、四八～四九頁。
㉜ 枚方市教育委員会、一九八五『枚方の遺跡と文化財』八六～一一五頁。
㉝ 飛野博文、一九八四「古墳からみた五・六世紀の山城地方」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和五七年度』一〇五～一一一頁。
㉞ 龍谷大学文学部考古学資料室（平良泰久・下村晴文編）、一九七二『南山城の前方後円墳』『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告』Ⅰ、八七～九八頁。
白石太一郎、一九八五「手白香皇女陵の問題」『古墳の起源と天皇陵』所収、一三九～一四五頁、帝塚山考古学研究所。

㉟ 直木孝次郎、一九八五「継体朝の動乱と神武伝説」『日本古代国家の構造』所収、二五五～二六二頁、青木書店。

㊱ 直木孝次郎、一九五八『前掲書』二六〇頁。

㊲ 沈奉謹・金東鎬、一九八三『染山尊池里土城』東亜大学校博物館『古蹟調査報告』第七冊。

㊳ 大山誠一、一九八二「継体朝成立をめぐる国際関係」『史学論叢』第一〇号、一三頁。